

『紅樓夢』後四十回における「黛玉勸学」考

船越達志

はじめに

『紅樓夢』続作部分の第八十二回、賈宝玉が八股文を罵倒した際に、林黛玉が反論し、八股文の修練を勧める、というくだりがある。

黛玉道「我々女孩兒家雖然不要這個、但小時跟着你們雨村先生念書也曾看過。内中也有近情近理的、也有清微淡遠的。那時候雖不大懂、也覺得好。不可一槩抹倒。況且你要取功名、這個也清貴些。」

黛玉は、「私達女の子にこれ（八股文を指す）は必要ありませんが、しかし小さい頃あなたの方の雨村先生に就いて勉強していた折に、かつて読んだ事がございました。こういったものの中には情にも理にもかなうものもありましたし、いささか清新で淡雅かつ深遠なものもありました。あの頃はあまりよくは理解できませんでしたが、立派なものだと思いましたわ。全てを否定すべきものではございません。ましてあなたはこれから（科挙に及第して）功名

を得ようとするのですから、これもまた清貴なものですわよ。」と言います。（程甲本）

しかし前八十回中では、黛玉が宝玉に科挙の学習（以下「挙業」と称す）を勧めたことは一度もなかった。「立身揚名」を口にしたこともなかった。宝玉はそんな黛玉を「知己」と称して深く敬愛し、黛玉の方も又そんな宝玉を「知己」と見做して心を寄せていた（第三十二回等）。「挙業」や「立身揚名」を軽視する考えは、二人の信頼関係の前提であり、その信頼が二人の恋愛感情を支えていたのである。前掲の黛玉の発言は、前八十回の設定と著しく異なっていると言える。

従来この場面は、「黛玉勸学」⁽¹⁾「黛玉賛美八股文字」⁽²⁾等と称され、早くから研究者の間で問題視されてきた（以下、このくだりを「黛玉勸学」と略称する）。例えばつとに一九三三年、俞平伯氏は後四十回の「欠点」の一つとしてこの場面を指摘し、「太可笑」と一笑に付して「続作者」⁽³⁾の粗忽を非難した（注2前掲俞論文）。又周汝昌氏も『紅樓夢新証（増訂本）』の「后記」中でこの一節に言及し、続作者と曹雪芹の思想の相違を指摘した⁽⁴⁾。馮其庸氏もこの場面に「與前不接」、「與前八十回完全相反」と繰り返しコメントを付して、違和感を露わにした⁽⁵⁾。新紅学を代表する三氏を例に挙げたが、その他にもこの場面を例に挙げて続作者の思想が曹雪芹と著しく異なっている事を述べる研究者は多い⁽⁶⁾。後四十回が前八十回と一貫していない事を示す代表的な一例と言うことができよう。しかしこれらはいずれも、「太可笑」「混帳話」等と一笑に付し、後四十回が前八十回と一貫していない事を批判するのみにとどまっている。一步踏み込んで、「黛玉勸学」に込められた続作者の意図を考察するものではない。

一方逆に少数派ではあるが、「黛玉勸学」には何の問題もない、とする立場の研究者も存在する。例えば林語堂氏は、俞氏に反論する立場から、黛玉のこの言葉は賈政に挙業を強いられ氣を腐らせている宝玉を宥める目的で発せられた「安慰」「勸慰語」に過ぎないのであり、何も違和感はない、と述べる⁽⁷⁾。王永氏も同様に、黛玉はただ単に宝玉を宥めるためにこの発言をしただけであって、必ずしもそれは彼女の本心とは言えない、と推測する⁽⁸⁾。胡文煒氏は、黛玉は

宝釵との和解（第四十五回）を契機に考えを改めたのだろう、と解釈する⁹⁾。しかしこういった見解はいずれも、黛玉をあたかも「生きた人間」であるかのように捉えて、その心情をあとから想像で推し量ろうとしているにすぎないように見受けられる。紙面にあらわれた林黛玉の裏には必ず作者（この場合は続作者）がいるのであり、その「作者」の意図や構想を考察することこそが文学研究の課題であろう。その意味でこれらは、十分な考察とは言えないように思われる。

筆者は、「黛玉勸学」には続作者の強い意図が込められており、それは続作後四十回全体を貫く方向性と関わっている、と考える。本稿はこの点を論じるものである。なお本稿では、原作者（曹雪芹）の原意を考察する際には「八十回本（「庚辰本」¹⁰⁾）を用い、続作者の意を考察する際には「百二十回本（「程甲本」）を用い」を用いる。

一 後四十回前半における賈宝玉の描かれ方

続作者の「黛玉勸学」設定に対する意図を考察するためには、後四十回における賈宝玉の描かれ方、及び後四十回における林黛玉の描かれ方、この双方を把握する必要がある。本章では、前八十回における賈宝玉の描かれ方を確認した上で、後四十回前半部分における賈宝玉の描かれ方を見ていく。

（1）前八十回の賈宝玉（曹雪芹の設定）

後四十回の賈宝玉を考察する前に、まず前八十回における描かれ方を確認しておく。前八十回において、宝玉は特異な価値観の持ち主として設定されている。幼い頃から以下のような発言をし、人々を驚かせているのだ。

「女兒是水作的骨肉、男人是泥作的骨肉。我見了女兒、我便清爽、見了男子、便覺濁臭逼人。」

「女の子は水で出来た身体であり、男は泥で出来た身体である。僕は女の子を見ると爽快な気分になるが、男を見ると濁臭を感じるのだ。」(第二回)

ここには極端なまでの男性蔑視が表現されているが、その中でも特に毛嫌いしているのが、「挙業」に励み名を上げようとする男達である。例えば第十九回にはそれらに対して「祿蠹」(祿盗人の意)の言葉で罵倒している様が語られている。更には次のような描写もある。

或如寶釵輩有時見機導勸、反生起氣來、只說「好好的一个清淨潔白女兒、也學的釣名沽譽、入了國賊祿鬼之流。……」……獨有林黛玉自幼不曾勸他去立身揚名等話、所以深敬黛玉。

もしも宝釵などが時に機を見ていさめたりすると、かえって怒りだし、ただ「申し分のない清淨潔白な少女までもが、名誉を求めるようなまねをして、『國賊祿鬼』の仲間入りをするとは。……」と言います。……ただ林黛玉だけが幼い頃より宝玉に立身揚名などの言葉で諫めたりした事がなかったので、深く黛玉を敬っている次第であります。(第三十六回)

「國賊祿鬼」も「祿蠹」とほぼ同義である。先には「水で出来た身体」と賛美していたはずの清淨潔白な女性(ここでは宝釵を指す)に対しても、「立身揚名」等の言葉で「挙業」を勧めたりすると、憎らしい「祿蠹」・「國賊祿鬼」の価値観に染まった者として、嫌悪の対象になるのだ(黛玉は唯一の例外と記されている点が注目される。だからこそ後四十回における「黛玉勸学」は問題視されるのである)。この考えを發展させると次のような見解に到る。

「女孩兒未出嫁是顆無價的寶珠、出了嫁、不知怎麼就變出許多的不好的毛病來。雖是顆珠子、卻沒有光彩寶色、是顆死珠了。再老了、更變的不是珠子、竟是魚眼睛了。分明一個人、怎麼變出三樣來。」

「女の子はまだ結婚しない時は値のつけられぬ宝の玉だけれど、結婚するとどういふわけかよくない所をたくさん持つように変化してしまう。玉ではあるけれど、光彩も立派な色合も失せ、死んだ玉になってしまうのさ。更に老

いると、もはや玉ではなくなつて、魚の眼に変化してしまう。間違いなく一個の人間だったのに、どうして三通りにも変わってしまうのだろう。」(第五十九回)

女性の結婚を否定しているのだ。また次のような発言もある。

(寶玉) 指着恨道「奇怪、奇怪。怎麼這些人只一嫁了漢子、染了男人的氣味、就這樣混帳起來。比男人更可殺了。」

(寶玉は) 指さしながら憎らしそうに「不思議だ、不思議だ。どうしてこういつた連中は一旦男に嫁ぐと、男の臭いに染まつてしまつてこんなふうになつてしまふのだろうか。男よりもっとひどいぞ。」と言います。

(第七十七回)

既婚女性に対して発せられた言葉である。元來清淨潔白であつた女性も結婚すると男の価値観に染まつてしまい、男よりもいつそう憎らしくなると言うのだ。寶玉は女性の結婚そのものに否定的な考えを抱いていと言えよう。

前八十回における寶玉は、このような特異な価値観を抱く者として描かれている⁴⁾。

(2) 後四十回前半の賣寶玉(続作者の設定)

では賣寶玉のこの特異な価値観は、後四十回においてはどのように扱われているのであろうか。まず注目すべきは、後四十回冒頭部分(第八十一回)である。曹雪芹原作の末尾(第八十回)は、孫家に嫁いだ賈迎春が一次帰省をし、孫家での虐待を訴えるという深刻な場面で幕を閉じている。後四十回の冒頭、寶玉はこれを受けて次のような発言をする。

寶玉道「我昨兒夜裡倒想了一個主意。咱們索性回明了老太太、把二姐姐接回來、還叫他紫菱洲住着。……等他來接、咱們硬不叫他去。由他接一百回、咱們留一百回、只說是老太太的主意。這個豈不好呢。」王夫人聽了、又好笑又好惱、說道「你又發了獸氣了。混說的是什麼。……」

寶玉は言います。「僕は昨夜ある考えを思いついたのです。僕達いつそのこと、大奥様に事の次第をはつきりとご報

告して、二番目姉様（迎春）をこちらにお迎えして、そしてまた紫菱洲に住んでいただきます。……奴が迎えに来て、僕達は決して彼女を渡さないようにするのです。奴が百回迎えに来て、僕達は百回引き留めて、『大奥様のお指図だから』とのみ返答するのです。こうしては良いのではないのでしょうか。」王夫人はこの話を聞くと、可笑しくもあり又腹立たしくもあり、「お前は又馬鹿げたことを。何をでたらめ言うのか。……」と言います。

嫁ぎ先の孫家から迎春を連れ戻して、もう二度と孫家には渡さないようにしよう、と言うのだ。非常識で無茶な提案ではあるが、これは前八十回の宝玉の特異な価値観（即ち、女性の結婚に否定的な考え）に一脈通じている。前八十回の価値観をそのまま受け継いでいると言えよう。しかし注目すべきは、この宝玉の言葉に対する母王夫人の反応である。

（王夫人）嗤の一笑。賈政道「笑什麼。」王夫人道「我笑寶玉今兒早起、特特的到這屋裡來、說的都是些孩子話。」賈政道「他說什麼。」王夫人把寶玉的言語笑述了一遍。賈政也忍不住的笑。

（王夫人は）クスッと笑います。賈政が「何を笑っているのだね。」と言うと、王夫人は「宝玉が今朝、わざわざこの部屋にやってきて、その話す内容がみんな子供っぽいのよ。」と言います。賈政が「あの子は何と言ったのかね。」と言うと、王夫人は宝玉の発言を一通り笑いながら述べました。賈政もこらえきれずに笑います。

王夫人はこの夜、夫賈政に向かって宝玉の先の発言を報告するのだが、完全に子供の戯言（孩子話）として笑い話にしている。話を聞いた賈政も又同様に、その幼稚さに苦笑している。迎春を引き留めようとする宝玉の提案は、思想としては前八十回の価値観を引き継いでいるものの、真顔で母親に提案している様子には滑稽さが漂う。ここが前八十回と異なる点である。続作者は宝玉を殊更に子供っぽく描き、彼の特異な価値観を「子供の戯言（孩子話）」という枠の中に封じ込めようとしているかのである。

ここで賈政は苦笑しながらも、この子供っぽい宝玉に対して「挙業」を強制しようとの強い決意を王夫人に告げる。

……（賈政）因又說道「你提寶玉、我正想起一件事來。這小孩子天天放在園裡也不是事。……我想寶玉鬧着總不好。

不如仍舊叫他家塾中讀書去罷了。」

……（賈政は）そこで又「宝玉の事と言えば、ちょうど思い出した。あの子を毎日園の中に置いておくのはやはり適当な事ではない。……宝玉をぶらぶらさせておくのはどうみてもよくないと思う。以前のように家塾で勉強させるに越したことはないだろう。」と言います。

こんな幼稚な「孩子話」を口にするのは、「挙業」に励まずいつまでも遊んでばかりで成長しないからだ、と言わんばかりだ。そして翌日、賈政は宝玉に「挙業」を強く命じる。

（賈政）因道「……你也該學些人功道理。別一味的貪玩。……」

（賈政は）そこで「……お前（宝玉を指す）も少しは人情や道理について学ばなくてはならん。いつまでも遊んばかりいてはいかん……」と言います。（第八十二回）

宝玉に対するこの賈政の言葉には、「挙業」を修練することによってはじめて人情や道理をわきまえ、人として成長できるのだとの見解が示されている。

一方賈母は、賈政とはまた別の角度から宝玉を一人前にしようと考えた。賈母は宝玉に妻を娶ってやろうとするのだ。（賈母）回頭瞅着邢夫人合王夫人笑道「想他那年輕的時候、那一種古怪脾氣比寶玉還加一倍呢。直等娶了媳婦纔暑暑的懂了些人事兒。如今只抱怨寶玉、這會子我看寶玉比他還略體些人情兒呢。」

（賈母は）振り返って邢夫人与王夫人を見て笑いながら「この人（賈政）がかつて若かった頃は、その奇怪な氣質は宝玉よりも倍もひどかつたくらいだよ。お嫁さんを娶って、やっといくらか物事の道理をわかるようになったのです。今はただ宝玉の事をとがめてばかりいるが、今私が見たところ、宝玉のほうがこの人（賈政）よりもいささか人情をわきまえているようですよ。」と言います。（第八十四回）

賈母は、結婚さえすれば物事の道理が分かるようになり、「奇怪な氣質」も改まるだろう、と述べている。あの賈政です

らも同じ道を歩んできたのだ、と述べている点にも注目すべきであろう。続作者は、宝玉の特異な価値観がありきたりのものであり、騒ぐほどのものではない、と読者に印象づけようと意図しているように思われるからだ。

幼さの抜けない宝玉に対して、父（賈政）は、成長するためには「挙業」の修練が必要であると説き、一方祖母（賈母）は、「結婚」が必要であると説いている。前節で見た如く、前八十回の宝玉は、「挙業」と「結婚」を嫌悪し否定していた。後四十回においては、恰もその「挙業」と「結婚」こそが、成長に必要な要素とされているのである（年長者の見解として提示）。即ち続作者は、前八十回に見られた宝玉の「挙業」「結婚」に対する嫌悪は、両者に対する理解不足が招く偏見であり、将来「挙業」に対する修練が進み成長すれば（或いは、結婚して成長すれば）、その偏見は解消する可能性がある、との余地を設定していると言う事ができよう。この他にも第八十九回に、侍女達（侍書、雪雁）が宝玉の子供っぽさを話題にする場面がある。後四十回前半における宝玉は、子供っぽさが随所で強調されているのである。続作者は宝玉を殊更に子供っぽく描き、彼の特異な価値観（前八十回の価値観）を「子供の戯言（孩子話）」という枠の中に封じ込めようとしている。

二 後四十回における林黛玉の描かれ方

次に本章では、後四十回における林黛玉の描かれ方について見ていく。黛玉は、宝玉とは逆に、成長した姿が強調されているように見受けられる。

（1）時間経過の強調

第八十七回には、以下の場面がある。

黛玉手中自拿着兩方舊帕，上邊寫着字跡。在那裡對着滴淚。……紫鵲見了這樣，知是他觸物傷情、感懷舊事。料道勸也無益，只得笑着道「姑娘還看那些東西作什麼。那都是那幾年寶二爺和姑娘小時，一時好了，一時惱了，鬧出來的笑話兒。……」紫鵲這話原給黛玉開心，不料這幾句話更提起黛玉初來時和寶玉的舊事來，一發珠淚連綿起來。

黛玉是手の中に二枚の古いハンカチを持っておりますが、そこには書き付けられた文字の跡があります。（黛玉は）これに向かい合つて涙を垂らしておりました。……紫鵲はこの様を見ると、黛玉がこれらの物を見て感傷的になり、旧事を思い返しているのだと分かりました。黛玉を宥めても無益だろうと推し量り、そこでただ笑いながら、「お嬢様、まだそんな物を御覧になつてどうなさるのですか。それらはみんな宝玉様とお嬢様が小さかつた頃のあの何年かに、時には伸直りしたかと思へば、また時には仲たがひして、そうした大騒ぎによつて生まれた笑い話ですわ。……」と言います。紫鵲のこの言葉は、元々黛玉を元氣づけようと思つて発せられたものだったのですが、思いがけずこれらの言葉がいつそう、黛玉が初めて（賈家に）来た頃と宝玉との旧事を思い出させることになり、（黛玉は）ますます玉の涙をぼろぼろ流し続けるのでした。

二枚の「古いハンカチ（舊帕）」とは、第三十四回に宝玉が黛玉に贈つたハンカチのことである。その時期はちょうど、宝玉が「立身揚名」を口にしない黛玉を称賛した頃（第三十二、三十六回等）と一致する。第三十四回と第八十七回の時間差は、僅かに三年である¹²⁾。三年前の事に対して「舊帕」「舊事」「小時」などの語を繰り返すのは、やや大げさな表現と言えよう。続作者はあえてこれらの語を連用し、第三十四回と第八十七回の間に断絶がある事を、読者に強調しようとしているかのである。また、賈母の次の言葉も注目しうる。

賈母聽了，自是心煩，因說道「偏是這兩個玉兒多病多灾的。林丫頭一來二去的大了，他這個身子也要緊。我看那孩子太是個心細。」

賈母は聞くと、とても気がもめて、そこで「あいにくなことにこの二人の玉兒（宝玉と黛玉を指す）は多病多災だ

ね。林の御嬢さんはだんだんと大きくなってきたけど、あの子はあの身体が肝心だよ。私が見たところ、あの子は氣を使ひすぎるようだね。」と言います。(第八十三回)

黛玉の病状悪化を聞いた際の賈母の言葉である。黛玉は成長するにつれ万事に氣を使ひすぎ、それによって身体を壊している、と指摘しているのだ。賈母がここで、黛玉の成長について言及している点が注目される。宝玉が年長者(父母や祖母)からいつまでも子供っぽいと見られているのとは正反対である。続作者は意識的に「成長しない宝玉」と「成長した黛玉」の対比を、読者に強調しているかのである。

(2) 林黛玉の成長

では続作者が描こうとする「成長した黛玉」とは、具体的にはどのような人物像であるか。後四十回の黛玉は成長して年頃になり自らの結婚を真剣に思い詰めるようになる。そして黛玉は、宝玉との関係までも変化させていく。

寶玉下學時也常抽空問候。只是黛玉雖有萬千言語、自知年紀已大、又不便似小時可以柔情挑逗、所以滿腔心事只是說不出來。

宝玉も塾の学習が終わると、しょっちゅう時間を見つけて(黛玉の)見舞いにやって来ます。しかし黛玉は幾千もの話したい言葉があるにもかかわらず、もはや年齢が大きくなったことを自覚しておりますので、小さい頃のように優しい心で氣を引いて思わせぶりな態度を示す事もできず、胸いっぱいの想いを口に出すことができないでおります。(第八十九回)

年齢を意識するようになった黛玉は自重するようになり、以前のように(前八十回のように)氣ままに宝玉に話しかける事がなくなる。宝玉を結婚相手として強く意識しているからである。もはや前八十回とは異なることを、続作者は読者に強調しているのだ。そんな中、注目しうるのは次の場面である。第九十四回、冬(十一月)であるにも関わらず怡

紅院の海棠が突然花開く。季節外れの開花である（通常は三月開花）。賈母、王夫人らの年長者が、これは宝玉に「喜事（おめでた）」が訪れる前兆ではないか、等と噂しているのを見て、黛玉は次のように述べる。

……獨有黛玉聽說是喜事、心裡觸動、便高興說道「當初田家有荊樹一棵、三個弟兄因分了家、那荊樹便枯了。後來感動了他弟兄們仍舊歸在一處、那荊樹也就榮了。可知草木也隨人的。如今二哥哥認真念書、舅舅喜歡、那棵樹也就發了。」賈母王夫人聽了喜歡、便說「林姑娘比方得有理、很有意思。」

……ただ黛玉だけは「喜事」と聞くと、心に触れるところがあり、心中嬉しくなつて次のように言います。「昔、田家には荊の樹が一株ありましたが、三人の兄弟が分家をしたために、その荊の樹は枯れてしまいました。後になつてそれに感じた彼ら兄弟が元通りに一緒に住むようになると、その荊の樹もまた繁茂したとのことです。草木もまた人に随うものであるということがわかりますわ。今、二番目お兄様（宝玉）がまじめに學問をなさつて、伯父様（賈政）がお喜びになつておりますので、あの樹（海棠）も咲いたのです。」賈母や王夫人はこの言葉を聞くと喜んで、「林のお嬢さんのこの喩えは道理があるし、面白いわね。」と言うのでした。

「喜事」とは自らと宝玉との結婚を指しているのではないかと早合点した黛玉が、弾んだ気持ちのまま、賈母や王夫人の意に沿うような故事を披露し、二人を喜ばせた場面である。自重していたはずの黛玉が思わず発した発言であり、彼女の日頃の考え（本音）が吐露されていると言えよう。林語堂や王永氏らの言う「宝玉を宥めるため」等ではなく、彼女の本音として設定されていることが見て取れる。注目すべきは、黛玉の「挙業」に対する見方である。賈政の嚴命以降、宝玉は、嫌々ではあるが、家塾で「挙業」を学ぶようになっていた。黛玉が指摘しているのはこの事である。黛玉は、宝玉が「挙業」に励んでいる事を、喜ばしいこととして嬉しそうに語っているのだ。このように見ると、第八十二回における「黛玉勸学」が孤立した一面面ではないことが見て取れる。後四十回における黛玉像は一貫した形象であり、宝玉とは逆に「挙業」や「結婚」に肯定的な考えを本音で抱く、「成長した」人物像として描かれているのだ。

(3) 第七十回末異文

後四十回における「成長した黛玉」について、一点補足しておきたい。続作者は、前八十回中の文章にも補筆を加え、後四十回における黛玉像の布石としていたのではないかと思われる個所があるのだ。

第七十回、姉妹一同が詩社の活動再開を決定したその直後、賈政が近く赴任地から帰京するとの連絡が入る。日々遊び呆けていた宝玉は、父親に日頃の勉強不足を叱責されるのではないかと恐れ、慌てて俄か勉強を始める。賈政に提出できる「日頃の勉強の痕跡」を少しでも多く揃えておくのである。その際黛玉は、宝玉の気が散る事を心配し、意識的に詩社の開催を控える。のみならず、宝玉の筆跡を真似て代筆をし、可能な限り宝玉の勉強を手伝う。宝玉が父親に叱られないようにと心配しての心尽くしである。緊迫感漂う日々が続くが、結局賈政は任務ができて帰京できなくなる。宝玉は安心して再び遊び呆けるようになり、元通りの緊迫感の無い生活に戻る。「八十回本」では、この話題は以上数行の記述のみで終わるのだが、「百二十回本」の同回末尾には、更に又以下のような記述がある。

從此寶玉的工課、也不敢像先竟擱在脖子後頭了。有時寫寫字、有時念念書。悶了也出來、合姐妹們頑笑半天、或往瀟湘館去閒話一回。衆姐妹都知他工課虧欠、大家自去吟詩取樂、或講習針黹之事、也不肯去擾他。便是黛玉更怕賈政回來寶玉受氣、每每推睡、不大兜攬他。寶玉也只得在自己屋裡、隨便用些工課。

これより以後宝玉の学業も、以前のようにすっかり放ったらかしにしておくというわけにはいなくなりました。時には習字をしたり、時には書物を読んだりします。気が滅入ると外に出てきて、姉妹たちとしばしふざけあったり、或いは瀟湘館へ行っておしゃべりをしたりします。姉妹たちはみな彼の勉強量が足りないのを知っていますので、皆は自分たちだけで詩を吟じて楽しんだり、或いは相互に針仕事について探求しあったりして、彼の邪魔にならないようにと気を使います。黛玉はなおさら、賈政が帰った後に宝玉が怒られるのを心配し、いつも眠ったふりをして、あまり彼の相手をしようとはいたしません。宝玉も仕方なく自分の部屋で、いいかげんに勉強するほかあ

りません。（「程甲本」第七十回）

以上の文は、「百二十回本」にのみ見える描写であり、続作者が特に加えた文字と考えられる（以下「第七十回末異文」と称す）。この「第七十回末異文」は、基本的にはすでに「八十回本」の同回に見られた黛玉の行為を踏襲した形になっている。読者としてはやや重複の感を覚えるが、一見特に大きな違和感はない。しかし両者を仔細に比較してみると、微妙にニュアンスが異なっていることがわかる。元々黛玉の行為は、急な賈政の帰京という緊迫した状況下で、宝玉の習字を代筆したり、詩社開催を控えたりしていたのであった。黛玉の行為は、慌てる宝玉の意を汲んで彼を助けようとしたものである。しかし「百二十回本」の「第七十回末異文」では、元通り遊び呆ける宝玉が黛玉の元を訪れた際に、寝たふりをして彼を「拒絶」し、勉強をさせようと促している。緊迫感の無い状況下において、日常の学習を促すこの黛玉の行為は、「黛玉勸学」に一脈通じる。そもそも「八十回本」における黛玉の「代筆」などの行為は、宝玉の学力向上という点から見れば、逆効果ですらある。両者は本質的に異なっているのだ。

続作者は元来「八十回本」においてすでに見られた黛玉の行為をなざると同時に、その行為が持つ意味合いを微妙にずらして、黛玉の変化（「挙業」に対する考えの変化）の「兆し」をさりげなくここで読者に提示し、「黛玉勸学」の布石としているのではないだろうか。続作者が後四十回中に「成長した黛玉」の姿を描くに当たって、読者の違和感をかわそうと細心の注意を払っている様が窺える。

このように見てくると、問題の「黛玉勸学」は、「成長しない宝玉」と「成長した黛玉」という対比の中で設定された一場面であることが窺える。

三 後四十回後半における賈宝玉の覚醒と「一步先行く知己」

「成長しない宝玉」と「成長した黛玉」という対比を確認してきたが、この対比に込められた続作者の意図は何なのか。それを読み解く鍵は後四十回の後半、特に第一百十六回以降の展開にある。以下、本章では後四十回後半の展開について見ていく（なお後半の賈宝玉は祖母（賈母）の命により薛宝钗と結婚している）。

（1）甄宝玉と「一步先行く知己」の構想

ここで注目すべきは、後四十回における甄宝玉（賈宝玉の分身）の描かれ方である。二人の宝玉（賈宝玉と甄宝玉）は、第一百十五回に初の対面を果たす事になるが、対面の直前には、以下のような描写がある。

且說寶玉自那日見了甄寶玉之父、知道甄寶玉來京、朝夕盼望。今兒見面、原想得一知己。

さて宝玉はあの日甄宝玉の父親に会って、甄宝玉が来京すると知ってからというもの、朝から晩まで待ち望んでおりました。今日対面することになり、一人の知己を得られると思っていたのです。

ここには甄宝玉を「知己」と見做し、彼との対面を心待ちにする賈宝玉の心情が描かれている（この「知己」の語は、前八十回において宝玉と黛玉の信頼を表すキーワードでもあった点が注目される）。しかし実際に対面を果たすと、賈宝玉は大いに失望する。

寶玉道「他說了半天、並沒個明心見性之談、不過說些什麼文章經濟、又說什麼爲忠爲孝。這樣人可不是個祿蠹麼。只可惜他也生了這樣一個相貌。我想來有了他、我竟要連我這個相貌都不要了。」

宝玉（賈宝玉）は、「奴（甄宝玉）は長い間話をしていたけど、本心が現れる話は全くせずに、「文章」「経済」とか、或いはまた「忠」とか「孝」とか言うばかり。こんな奴は「祿蠹（祿盗人）」じゃないか。ただ惜しいかな、奴

も又このような同じ容貌に生まれついているとは。奴がいるのかと思うと、私はいつそんな容貌なんていらな
と思うよ。」と言います。(第一百十五回)

甄宝玉は、「文章」「経済」等の話ばかりを繰り返したのである。ここで賈宝玉が「祿蠹」の語を用いて罵倒している点
が注目される。この言葉は前八十回中で「挙業」に励む男達を罵倒した言葉そのものである。「知己」と思い込んでいた
はずの相手が、「祿蠹」だったと言うのだ。

だがそんな賈宝玉自身にも変化が訪れる。第一百十六回、宝玉は夢で太虚幻境を訪れるが、夢から醒めた後に「悟り」
の境地に達し、全てを達観するようになり、女性に対する執着を捨て去る。拒絶していたはずの「挙業」に対しても、
宝釵の説得を受け入れ、身を入れて取り組むようになるのだ⁽³⁾。その際、以下の記述がある。

……兩個談了一回文、不覺喜動顔色。……(賈蘭)又説了一會子下場的規矩並請甄寶玉在一處的話、寶玉也甚似愿
意。

……二人(賈宝玉と賈蘭を指す)は暫く文章について話しますが、思わず喜びが顔に浮かび上がってくるのでした。
……(賈蘭は)又しばらく科挙試験の規則について話し、また甄宝玉さんも呼んでごいっしょに(勉強しましょう)、
と言いますと、宝玉の方も頗るそれを望んでいるようなそぶりを見せます。(第一百十八回)

甥の賈蘭とともに作文(八股文)や科挙試験について話し合っている場面であるが、「不覺喜動顔色(思わず喜びが顔に
浮かび上がってくる)」とある点が注目される。心から嬉しそうな様子を見せているのである。そして更に注目すべき
は、甄宝玉に対する賈宝玉の態度の変化である。甄宝玉を呼んで三人で研鑽を積もう、との賈蘭の提案に対して、賈宝
玉は積極的な様子を見せている。「祿蠹」と罵倒していたはずの甄宝玉を受け入れているのだ。これは「祿蠹」の言葉で
非難していた男たち(即ち、「挙業」に励み身を立てようとする男たち)全体に対する認識の変化を示している、とも言
えよう。賈宝玉は、甄宝玉と同じ価値観の人間に「変化」したのである。

実は甄宝玉の方も又以前、この賈宝玉と全く同じような経験をしていた。甄宝玉も元来は「举業」を毛嫌いしていたのであるが、夢で「太虚幻境」を訪れた後に、「悟り」の境地に達し、女性に対する執着を捨て去ると同時に、「举業」に積極的に取り組むようになったのである(第九十三回)。甄宝玉が辿ったこの一連の体験と変化の過程は、第一百十六回における賈宝玉の体験と変化に完全に一致する。即ち甄宝玉は、賈宝玉の変化を「一步先に」経験していたのである。言葉を換えれば、甄宝玉は「一步先行く賈宝玉」とも言える存在だったのだ¹⁴⁾。この点について更に付言すれば、王夫人は甄宝玉と対面した際、「我が家の宝玉(賈宝玉)よりずっと大人びているようだ(覺得比自己家的寶玉老成些)」との感想を抱いている(第一百十五回)。これも甄宝玉が「一步先行く」存在である事を示唆している。続作者はやはり二人を一心同体の「分身」として設定していたのである。第一百十五回における二人宝玉の対面は、「変化する前の宝玉(賈宝玉【即ち、假の宝玉】)」が「変化した後の宝玉(甄宝玉【即ち、真の宝玉】)」に対面した、という意味合いの場面だったのである。甄宝玉はやはり賈宝玉の「知己」(言わば、一步先行く知己)であったのだ。以下本稿では、この二人に見られる関係を「一步先行く知己」と称する事にする。

(2)「一步先行く知己」としての林黛玉

本題の林黛玉に戻ろう。実は林黛玉にもこの甄宝玉と全く同じ設定が施されているように思われるのだ。注目しうるのは、問題の「黛玉勸学」(第八十二回)に対する賈宝玉の反応である。

寶玉聽到這裡、覺得不甚入耳。因想黛玉從來不是這樣人、怎麼也這樣勢慾薰心起來。又不敢在他跟前駁回、只在鼻子眼裡笑了一聲。

宝玉は(黛玉の話を)ここまで聞くと、堪えがたい感じがいたします。黛玉さんは、以前はこんな人ではなかったのに、どうしてこのように名譽欲で理性を迷わせてしまったのか、と思うのです。しかしまた面と向かって反駁

するわけにもいかないので、ただフンと鼻の中でせせら笑うばかりでした。(第八十二回)

「挙業」を勧める黛玉の言葉を聞いた宝玉は、その言動を訝しみ、露骨に不快感を滲ませている。あろうことが最愛の黛玉に対して、鼻でせせら笑うような冷淡な反応すら見せている。信頼関係で結ばれているはずの二人にすれ違いが描かれているのだ。「知己」であるはずの黛玉が「挙業」を勧める発言をし、それに対して賈宝玉が嫌悪感を露わにする、というこの流れは、先の甄宝玉との対面と全く同じ展開である。そして科挙受験直前には以下の描写がある。

(寶玉) 走過來給王夫人跪下、滿眼流淚、磕了三個頭、說道「母親生我一世、我也無可答報。只有這一入場用心作了文章、好好的中個舉人出來。……」

(宝玉は) 王夫人の元へ進むと跪いて、目いっぱい涙を流しながら、三度叩頭の礼を行なつて、「母上は私を生んでくださいましたが、私は何も恩返しができませんでした。ただ今回、一たび試験場に入りましたら心を込めて文章を作り、立派に挙人に及第して出てまいります。……」と言うのです。(第一百十九回)

母(王夫人)を喜ばせるために、心を込めて文章(八股文)を作り、見事挙人に及第してみせましょう、というこの宝玉の宣言は、先に確認した「成長した黛玉」の言動と一致する。一度は嫌悪感を抱いたはずの黛玉の発言であるが、「悟り」後の宝玉は、それと同じような趣旨の発言をしているのだ。これも又、甄宝玉と賈宝玉の関係に一致している。林黛玉と甄宝玉は、同じパターンで描かれているのだ。ともに「知己」の語で表現されている点にも両者の相似が窺えよう。林黛玉は先の甄宝玉同様に、「一步先行く知己」として設定されているのである。

このように見てくると、本稿の課題である「黛玉勸学」は、この「一步先行く知己」という構想の一端だった事が見て取れる。

四 二人の「一步先行く知己」役割の相違

しかしこの二人（林黛玉と甄宝玉）の「一步先行く知己」には、最後の最後に到って、それぞれ異なる役割が付与されているように見受けられる。本章ではその点を考察する。

（一）林黛玉と賈宝玉の関係

まず林黛玉について見てみよう。黛玉は第九十八回に他界し舞台から退場しているので、ここでは賈宝玉自身の動きに注目する。前章で確認した如く、太虚幻境帰還後の賈宝玉は熱心に「举業」に励むようになり、第一百十九回には甥の賈蘭とともに受験に赴き、第七席の好成績で举人に及第する。だが宝玉本人は、試験終了と同時に失踪してしまう。その後、賈政は道中江南にて、僧侶と道士に連れられた宝玉を見かけるが、そのまま宝玉はいずこかへ去ってしまったのであった。では宝玉はどこへ去ったのか。宝玉の行き先について注目すべきは、末回末尾における甄士隱の次の言葉である（聞き手は賈雨村）。

士隱笑道「……仙草歸眞、焉有通靈不復原之理呢。」

士隱は笑って、「……仙草が眞に帰した（本来の姿に戻った）からには、通靈が元の姿に戻らない道理がありませんか。」と言います。（第一百二十回）

ここで言う「仙草」とは絳珠草（即ち、林黛玉）、「通靈」とは通靈宝玉（即ち、賈宝玉）をそれぞれ指している。それぞれの帰着点である「歸眞」「復原」とは、第一回冒頭に記されていた「神仙世界」への帰還を指していることは明らかであろう。即ち甄士隱は、通靈宝玉（賈宝玉）が絳珠仙草（林黛玉）の後を追いつけるようにして「神仙世界」へと帰還した、と解説しているのだ。このように見てくると林黛玉は、「神仙世界への帰還」という最終局面をも含めて、宝玉

にとつて「一步先行く」存在になっていることが見て取れる。林黛玉は「一步先に」成長し、「一步先に」神仙世界へ帰還したのだ。

では、この「神仙世界への帰還」という最終局面に込められた続作者の意図は何か。続作者は例えば、賈宝玉を現世に留めおく展開を描くことも可能であつたはずである。賈宝玉が拳人及第後、科挙官僚として買家を復興する、という展開の選択肢もありえた。しかしその選択肢はあえてとらなかつた。なぜか。ここで注目しうるのは、宝玉の失踪に対する妻・宝釵の感想である。

那寶釵却是極明理、思前想后、寶玉原是一種奇異的人、夙世前因自有一定、原無可怨天尤人。

ところが宝釵は極めて道理がわかる人で、前後の事を考えてみると、宝玉はもともと不思議な人物で、前世の因縁が自ずと決まっているのであれば、天を怨んだり人を咎めたりすべきではないのだ、と悟りました。(第一百二十回)

宝玉は元々不思議な因縁を担った人なのだから、本来の神仙世界に戻るべき運命だったのだ、と納得しているのだ。これと同様の感想は、賈政、探春、皇帝等多くの作中人物の発言中にも見られる。続作者の意図は正にここにある。続作者は、原作第一回冒頭の「神話」の発端に呼応させ、末回で主人公を神仙世界に帰還させるという展開に拘っているのだ。「首尾一貫」の展開を強く意識しているからである。第一回のいわゆる「還淚姻緣譚」における、林黛玉(絳珠草)が賈宝玉(神瑛侍者)の後を追って現世に謫仙した、という「発端」に合わせて、末回では逆に賈宝玉が林黛玉の後を追って神仙世界に帰還する、という「結末」を用意したのである。首尾一貫を整え、「前八十回との整合性」をつけようと思図する続作者の強い意図が見て取れよう。又もう一点、これには「賈宝玉像の統一」という意図もあるように思われる。前述の如く、賈宝玉は前半で科挙官僚を「祿蠹」「國賊祿鬼」と痛烈に罵倒していた。科挙に及第したものの、官には就かず神仙世界に帰還した、という結末にすれば、こういった前半の宝玉像ともある程度統一が保てよう。賈宝

玉の神仙世界帰還は、このように「前八十回との整合性（即ち首尾一貫）」と「前八十回の賈宝玉像との統一」の一石二鳥を狙って考え抜かれた、続作者苦心の措置であったのではないか⁽⁵⁵⁾。「一步先行く知己」としての林黛玉は、最終的にこの構想の中で位置づけられる。

（2）甄宝玉と賈宝玉の関係

では、もう一人の「一步先行く知己」である甄宝玉はどうか。賈宝玉失踪の翌日、賈蘭は謝恩会に赴き、甄宝玉と出会うが、その場面は以下のように描かれている。

明日賈蘭只得先去謝恩、知道甄寶玉也中了。大家序了同年。提起賈寶玉心迷走失、甄寶玉嘆息勸慰。

明くる日、賈蘭はやむなくまず謝恩会に向きますと、甄宝玉も及第した事がわかりました。二人は同期で及第したことを祝って、挨拶を交わします。（賈蘭が）賈宝玉が心迷って失踪したことを持ち出すと、甄宝玉は嘆息して

（賈蘭を）慰めます。（第一百十九回）

甄宝玉も举人に及第するが、賈宝玉の失踪については嘆息している。これは即ち、甄宝玉は賈宝玉とは異なり、将来現世に残って科挙官僚の道を歩んでいくであろう事を示唆している。分身であるはずの甄宝玉が、賈宝玉とは異なる道を歩む設定になっているのだ。しかしこの点にこそ、「一步先行く知己」としての甄宝玉が担う真の役割があるのではないかと筆者は考える。続作者は、賈宝玉を神仙世界に帰還させ、物語の舞台から退場させる一方で、彼が本来舞台上（現世）においてなすべき姿を、その分身・甄宝玉（真の宝玉）の身に委ねたのではないだろうか。『挙業』に対する熱心な取り組み↓受験↓及第』という流れそのものには、科挙に対する肯定的な立場を明確にしよう、という配慮があるに違いない。統制の厳しい乾隆時代にあつて、主人公が科挙を否定したまま物語を終了させるのは、穏当ではないからである。だが、及第すると同時に主人公が失踪したのでは、せっかくのこの配慮がやや希薄になる恐れがある。科挙受

験本来の目的は、及第後「科挙官僚」となって世のため、国のために、尽力することであるはずだからだ。嘗て主人公が科挙官僚を「禄蠹」「國賊禄鬼」と罵倒していたが、それとは一線を画す、という小説の立場を最後に明確に示していた方が無難である⁽⁶⁶⁾。そこで主人公の分身である甄宝玉に、将来科挙官僚として活躍する余地を残したのではないか。筆者がこのように考えるのは、同様の設定が賈宝玉の「遺腹子」にも施されていると思われるからなのだ。末回、薛宝釵は宝玉の子を妊娠した事が語られているが、その子が将来科挙に及第し、官僚として活躍して賈家を復興することがほめかされている（甄士隱の言葉）。続作者は、主人公の分身甄宝玉（真の宝玉）と主人公の実子（遺腹子）が、それぞれ科挙官僚となる（であろう）事をほめかす事によって、科挙及び科挙官僚に対する肯定的な立場を明確にしよう⁽⁶⁷⁾と意図しているのではないか。これこそ「一歩先行く知己」としての甄宝玉が担う最終的な役割なのではないだろうか（架空の神仙世界へ帰還する假（フィクション）の宝玉【賈宝玉】に対して、現実世界に残る真の宝玉【甄宝玉】という対比である）。

結び

本稿では後四十回における「一歩先行く知己」という構想について見てきた。従来から批判される事の多い「黛玉勸学」は、この構想の一端であると考えたのである。「一歩先行く知己」という構想は結局の所、主人公とヒロイン（或いは主人公と分身）との間に、成長に対する「時差」を設けたという事である。最後にその意味（続作者の意図）について考え結びに代えたい。

続作者は、続作構想の当初から後四十回の末尾に「科挙及第」⁽⁶⁷⁾の一場面を設ける予定だったと思われるが、これと前八十回中の賈宝玉像との間には大きな溝がある。前半からの読者に違和感を抱かせないように、どう整合性をつけるか、

これは続作者にとって大きな課題であったに違いない。もし後四十回のはじめから「挙業」に積極的な賈宝玉を強引に描いたなら、どうしても違和感が際立ってしまい、読者は納得しないであろう。「時差」設定の意図は正にここにあるのではないか。主人公とヒロイン（または分身）との間に成長の時差を設ける事によって、続作者はいったん前八十回と同じ価値観を持つ賈宝玉（即ち「成長しない宝玉」）の姿を読者の前に提示し、その後、彼が成長して「変化」する過程を読者に示す事が可能になる。これによって続作者は、賈宝玉「科挙及第」に対する読者の違和感をかわそう（前半と整合性をつけよう）と意図しているのではないか⁽¹⁸⁾。前八十回の流れと一致しないとして非難・罵倒されてきた「黛玉勸学」であるが、続作者の意図は逆に「前八十回との整合性」にこそあったのだ。

更に又二つ目の意図として、「知己」との対立という構図によって宝玉の思想をいったん読者に強調し、その後の彼の「変化」をより鮮明に読者に印象付けようとの「効果」をも狙っているように思われる（この点は「前稿」⁽¹⁹⁾にて考察した「五児復活」に込められた意図とも重なる）。

後四十回は『紅樓夢』の結末をなるべく（続作者がそう考えたと思われる）肯定的な方向へ近づけようと構想されている⁽²⁰⁾。写本の形で密かに読み継がれていたこの小説を、「出版」という形で世に広めようとする続作者にとって、これは極めて重要な点であった。「この小説は科挙批判の書ではない」という立場を明確にすることは、その意味において必要不可欠な措置であった。しかし又一方で、それが為に前半から読んできた読者に違和感を与えることになってはよくない。前八十回との整合性にも気を配る必要がある。「肯定的な結末へ導く事」と「前半との整合性」、この二つの配慮が後四十回全体の方向性になっていると言えよう。本稿第四章で考察した林黛玉と甄宝玉の最終的な役割も、前者（林黛玉）は「首尾一貫」（或いは「賈宝玉像の統一」という「前八十回との整合性」の配慮に関わり、後者（甄宝玉）は科挙（官僚）肯定という配慮に関わっていた。この点もそれを物語っている。

(注)

- (1) 勞楊「關於『黛玉勸學』公案」(貴州省紅樓夢学会『紅樓』二〇〇四—二〇〇五) 参照。
- (2) 俞平伯「後四十回底批評」(上海亞東圖書館『紅樓夢辨』上卷所収、一九二二)。
- (3) 後四十回の作者を高鶚(蘭墅)とみる学者が多かったが、近年では異論も多い。本稿では「統作者」と称するにとどめる。
- (4) 周汝昌『紅樓夢新証(増訂本)』(中華書局、一九八五)「后記」参照。
- (5) 馮其庸重校評批『瓜飯樓重校評批《紅樓夢》』(遼寧人民出版社、二〇〇五) 参照。
- (6) 例えば近年の論文では、蔡義江『《紅樓夢》原作与統作的落差』、段启明「試説『後四十回』」(ともに曹立波・周文業『二百二十回本《紅樓夢》』版本研究和数字化論文集)首都師範大学出版社二〇一一年所収)等参照。
- (7) 林語堂「平心論高鶚」(一九五七)。陝西師範大学出版社刊行「平心論高鶚」(二〇〇四年刊行)を参照。
- (8) 王永「論高鶚統書功的功過」(『紅樓夢學刊』一九八五—一) 参照。
- (9) 胡文煒「評《紅樓夢》後四十回的寶黛形象」(遼東學院學報(社會科學版))第九卷第六期、二〇〇七) 参照。
- (10) 影印本『脂硯齋重評石頭記』(中華書局香港分局、一九七七)の他に、鄧遂夫校訂『脂硯齋重評石頭記庚辰校本』(作家出版社、二〇〇六)も参照する。
- (11) この節の引用文は全て「庚辰本」に拠ったが、百二十回本(程甲本)においても、論旨にかかわるような異同はない。
- (12) 松枝茂夫「紅樓夢年表(第八十一回—第二百二十回)」(同氏訳『紅樓夢』第十二卷所収、岩波文庫) 参照。
- (13) 厳密に言えば、太虚幻境帰還直後の宝玉はまだ卒業に積極的ではなく、専ら隠遁にのみ関心を向けているが、宝釵の説得を受けて(第一百十八回)、卒業に身を入れるようになる。これらの展開は本論中で後述する「神仙世界への帰還」の伏線と考えられる。この点は、本稿では煩雑を避け詳述しない。
- (14) 甄宝玉が先行する形の「分身」になっている点に関しては、拙稿「紅樓夢」後四十回における「五児復活」と太虚幻境」(『東方学』第一三四輯、二〇一七)でも言及した。また池間里代子「甄宝玉論—物語の時間軸と空間軸を手がかりに—」(『東京紅学レポート』八、二〇一八)にも「ここでの甄宝玉の役割とは、「精神的成長」を賈宝玉より先行させて賈宝玉と読者に示すこと」との見解が見えるが、本稿が問題にしている「統作者の構想」という視点は見られない。
- (15) なお曹雪芹の原作においても賈宝玉の失踪(出家)という結末は用意されていたらしい(例えば第二十一回「庚辰本」「王府本」「有正

本」各本に見られる脂硯齋評参照」。続作者はこういった伏線も正確に理解しているようだ。ただし曹雪芹の構想（宝玉の出家）は後四十回とは全く異なるものであったと思われる。この点については拙著『紅樓夢』成立の研究』（汲古書院、二〇〇五）第三章等参照。

(16) この点についてはつとに文雷「程偉元与《紅樓夢》」（『文物』一九七六一一〇）等に、続作者が封建主義思想に合致させようと意図しているとの指摘がある。

(17) 後四十回における賈宝玉科舉及第に関して論じた専論には、張惠「《紅樓夢》后四十回的宝玉中舉正読」（『武漢大学学报（人文科学版）』二〇一二年九）、張同勝「従前八十回与后四十回教育叙事的不同看《紅樓夢》的作者問題」（『明清小説研究』二〇一三二四）等があるが、本稿のような視点は無い。

(18) 村松暎「『紅樓夢』後四十回の評価」（『慶應義塾創立百年記念論文集』、一九五八）は、「第八二回に宝玉に八股文を罵倒させているのは、まんだら曹雪芹の受売りばかりでもあるまい」と述べて続作者の思想を肯定的に評価するが、そうではなく、いったんは前八十回と同じ価値観を持つ賈宝玉を読者の前に提示し、その後の彼の「変化」を読者に印象付ける、という点にこそ続作者の「意図」があると筆者は考える。

(19) 拙稿「『紅樓夢』後四十回における「五兒」復活」と太虚幻境」（注14前掲）参照。

(20) 拙稿「巧姐の「忽大忽小」と林黛玉の死——『紅樓夢』後四十回の構想考——」（『日本中国学会報』第六一集、二〇〇九）、同「『紅樓夢』後四十回における林黛玉の悪夢」（『中国中世文学研究』第六三・六四合併号、二〇一四）、同「『紅樓夢』後四十回における賈宝玉の病と通靈宝玉——神瑛侍者来歴の改編を端緒として——」（『富永一登先生退休記念論集中国古典テキストとの対話』研文出版、二〇一五）、同「『紅樓夢』後四十回における「五兒」復活」と太虚幻境」（注14前掲）参照。